



沖縄キリスト教学院 2015 年度前期 終業礼拝メッセージ

学長 中原 俊明

「敵意が戦争を招く」 Antagonism invites war

(エフェソの信徒への手紙 2:14-16)

1,今から約 2 千年以上も前の話である。パウロという名前を聞いたことがあるでしょう。彼は、もともと熱心なユダヤ教徒であったが、キリスト教徒を迫害し、根絶させることこそが自分の使命であり、生き甲斐として活動していた人物だった。そのパウロが、ダマスコという町、それは、現在のシリアの首都ダマスカスだが、そこへ向かう途上で、十字架上で処刑された後、復活して現れたキリストに出会い、180 度の劇的な転換をして今度はキリスト教を命がけで述べ伝えるイエスの弟子に変わり、伝道者になった。それまでのユダヤ社会では、ユダヤ人とそれ以外の、いわゆる異邦人が鋭く対立していた。彼らは、多くの神々が雑居するあいまいな信仰の中で生きていた。しかしイエス・キリストの出現によって、ユダヤ人と異邦人の間のあらゆる隔てが取り去られ、和解が生まれることになった。聖書の言葉によれば、イエスこそは私たちの平和であり、敵意という隔ての壁を取り去って下さった方だとされる。実際に当時のエルサレムの神殿には、約 1 メートル半の高さの石垣があって、異邦人はそこを超えて神殿に近づくことが許されず、これがユダヤ人と異邦人の間に敵意、あるいは対立を生み出すもとになっていた。けれども、イエスご自身がこの定めを廃止した結果、敵意や対立が消え、平和な関係が生まれたといわれる。敵意を放っておくと、対立が深まり、戦争になってしまう、というのは我々が歴史の中で学んだ大きな教訓である。そしてこれからもよほど注意しないとまた同じ過ちを繰り返す危険がある。そういう過去の歴史を振り返り、現在の危うい状況に目を向けてみよう。



2,戦争中の日本では、アメリカやイギリス、そして中国（当時は支那と呼んだ）等との間に「敵意」が作られた。つまり、これらの国々は鬼畜（鬼畜生）とされ、日本が天に代わって退治しなくてはならない敵だとされた。もしも日本国民が彼らの捕虜にでもなったら、女性はみんな辱められて殺されるし、男性も残酷な方法で殺される、だから絶対に捕虜になるな、捕虜になるよりも自決せよ、というのが、当時大人にも子どもにも浸透した教えだった。これは全くのうそだったが、それを疑うことは殆どなく、その教えが浸透した結果として、沖縄戦では、慶良間諸島や読谷のチビチビリガマでの集団自決という悲劇が起きたのである。こうして、しばしば戦争では国民の間に敵意を増幅するため、政府による嘘がつきものである。

その具体的な例を2つほどみておこう。

まず、宣伝の天才といわれたナチスドイツのヒットラーである。1939年8月末にナチスはポーランドを攻撃したが、これを正当化するため、まずナチの親衛隊にポーランド軍の制服をつけさせ、ポーランド国境にあるドイツの放送局を占領させ、ポーランド語でドイツ非難の放送をさせた。そして、ヒットラーは、国会で早速この事件を取り上げ、ポーランドがドイツへ侵略したと非難し、防衛措置をとらざるをえない、と「うそ」を述べて国民を納得させたうえ、ポーランドへの侵略を始めた（H.マウ「ナチスの時代」岩波新書 p.126）。こうして理知的なはずのドイツ国民がやすやすとだまされてしまった。

もう一つの例は、日本と中国との戦争のきっかけとなった1931年の「柳条湖事件」である。日本軍が南満州鉄道の線路をわざと爆破し、それを中国軍の仕業だと「うそ」の情報を流して、関東軍が中国軍相手に戦闘を開始したが、国民はその真相を知らなかった。その軍事行動は、当時ワシントン会議



で日本も加盟し、アジア太平洋に安定した状況を作りあげるために合意した条約へ挑戦する行動であったし、それが太平洋戦争へ発展するきっかけとなった（入江昭「太平洋戦争の起源」東大出版、p.11）。

3,再びこのような間違いを繰り返さないために、何が必要だろうか？

何よりも、国民、特に若い皆さんがしっかりした批判精神をもって、この国の現状と将来を考え、そして行動することである。特に今後、18歳以上は主権者として、選挙権を行使することになる。全国で約240万人、沖縄県だけで3万人余りが新たに有権者となる。皆さんは、きちんと学習して、将来に悔いのない賢い一票を投ずる責任がある。政治の側では、学校教育に加えて、公共放送やマスコミ全体に影響力を及ぼして、かつての鬼畜米英と同じように、外に敵を作り、ある国をあたかもならず者のようにいいふらし、それが今にも攻めてくるかのようにあおり立てる動きが出て来る可能性がある。そこで注意してほしいのは、この国のマスコミが殆ど真実を伝えておらず、また国民も情報操作に弱いという問題である。「国境なき記者団」というNGOがあつて、毎年世界各国の報道の自由をランク付けしているが、2012年度に日本は22位だったのが、安倍内閣になってどんどん順位を落とし、今年は何と61位に下がっている。今のままでは、どんどん下がる一方でしょう。先日の余りにも独断的な百田発言にみられるように、この国が報道の自由後進国であり、特に憲法で保障された報道や言論の自由が風前のともしび状態であることをぜひとも知ってほしい。放送法という法律があつて、アメリカで生まれた公平原則（fairness doctrine）が組み込まれており、反対意見も対等に報道することが義務づけられているが、実際には、公共放送が先頭に立ってそれを無視している。こうして言論空間、報道環境が劣化する中で、ただ一つの救いは、沖縄地元の新聞の報道姿勢が高く評価されていることで、



皆さんにはぜひとも地元紙を読んでほしい。

4,いま、批判精神との関連で一つ思い出すことがある。それは、アメリカの高校や大学で広く取り入れられている **debate** という授業である。皆さんも学んだかと思うが、私の場合、半世紀以上も昔に、留学中にある **law school** で受けた国際法の授業を思い出す。そこでは、先生から架空の国際紛争、**hypothetical case**、例えば A という国が隣の B という国にいきなり武力行使をした、といった事例が設定され、学生はみな世界の国々を一つずつ割り当てられた。すると学生は、その国がどんな歴史をもち、今までどんな立場から、どんな議論を国連の中で展開してきたか、をしっかりと調べて、**position paper** を作り、模擬国連総会でその国の代表として発表するという授業だった。自分自身の考えは側においておき、その国の人になり切って考える、すると今まで見えなかった問題の側面がみえてくる、という経験をした。このように問題を複眼的に、また立場を変えて考えることで、政府や権力の作り上げた「敵意」や「仮想敵国」に引っぱりこまれない知恵がつくと思った。相手の立場で考えてみるというのは、とても大事なことだし、「敵対心」を取り除くきっかけになると思う。

5,人類の歴史が教えるところでは、2つの国が領土にこだわり、一步も譲らないという状況が行き着く先は、力による解決、つまり戦争だといわれる。もちろん今は、国連ができ、国際司法裁判所もあるので、昔とは状況が同じではないが、それでもこの種の紛争はなくなる。しかし、過去の歴史の中にこれとは違ったケースもある。つまり「敵意」の虜にならず、武力によらず、知恵を働かせて戦さを防いだ例を見つけることもできる。2つの例をあげてみる。



第1に、わが琉球王国である。15世紀半ばに当時の琉球国王・尚泰久が作らせた万国津梁の鐘に象徴される考え方によれば、武力によらず、交易、芸術、学術文化の交流によって、大小の近隣諸国と平和な関係を築いた歴史がある。むろん、武器がなかったわけではないし、奄美に攻め込んだ歴史も忘れてはならないが、基本は「非武の文化」と呼ばれる歴史をもつ。東京大学の歴史学者でその著書も広く読まれている加藤陽子教授は、琉球王国と中国（主に清国）との関係を形作っていた朝貢体制（貢ぎ物を捧げ友好を維持する）について、これはきわめて安価な（つまり金のかからない）安全保障装置だったとポジティブに見ていて、興味深い（加藤陽子「それでも日本人は戦争を選んだ」岩波、p.90-91）。また自分のことになると、大分以前のことだが、私の前任の国立大学時代に、学長のお供をして、中国の福建省と湖南省にある姉妹大学を訪問したことがある。そこでは、「琉球」（るーちゅー）という名で紹介されたとき、そこに集まった教員や職員たちから格別暖かい歓迎の拍手ともてなしを受けた。私は、今もあの人たちの善意を疑わないし、敵意をもつことも考えられない。

次に、またドイツの話になるが、スイスという国はドイツに隣り合っているのに、第2次大戦のときにはヒットラーの攻撃を受けなかった。なぜか、ということをめぐるいろいろな議論がある。強い民兵組織があったからとか、地形から攻めるのが困難だったなど等。私が興味を感じたのは、沖縄にも講演にみえたロンドン大学の森嶋通夫教授（故人）の解釈である。それはスイスが中立国としてのスタンスを守ったこととそれがナチスにも一定の信頼を与えたからだという。ドイツの資本家や指導者たちは、もし負けた場合を考え、中立だったスイスに多額の預金をしていたことと、ナチスは戦争で負けそうになった時、敵と交渉する際の橋渡し役としてスイスに期待していた、と森嶋先生はみる（森嶋通夫「自分流に考える」文芸春秋社、pp.104-6）。こ



こからのヒントとして、私が思ったのは、日本もアメリカと一緒に戦争をする国になるのではなく、平和憲法をしっかりと守って、どこにも敵を作らず、中立を貫くことで、戦争のリスクをなくすることができるはずだということである。それこそが、今日の聖書で示されたように、敵意という壁を壊し、十字架によって敵意を滅ぼして戦争を退け、神の平和を実現する道筋だと信じる。(以上)

(祈り)恵み深い天の神さま、今日の月曜礼拝を感謝します。教職員、学生、一人ひとりが、今こそ目覚め、この国の行く末を見つめてあなたにある平和の実現に貢献できるようにしてください。やがて夏休みに入りますが、みんながあなたに守られて心身共に健康な日々を過ごすことができますよう、これらの願いと感謝を主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。